



島大学教育学部の研究園として創設されたので、現在でも幼年教育研究施設や大学院博士課程幼稚学専攻とは密接で良好な関係を保ちながら、子どもの心身の発達や教育、発育、健康などについて研究の交流をしている。

広大フォーラムの読者の方で、広島大学には十一の附属学校園があり、その中に二つの幼稚園があるをご存知の方はそれほど多くないであろう。一つは、およそ百年の歴史を持つ広島大学附属三原幼稚園であり、もう一つが、わが広島大学附属幼稚園である。

本園は、昨年度三十周年を迎えたばかりであるので、他の附属学校園に比べると歴史は浅い。しかし、幼児教育の実践と研究にかける意欲と情熱はどこにも負けないつもりである。

早いもので、広島市千田町での二年あまりの幼稚園教育を終え、東広島市の現在の位置に引っ越してきて今年で七年目を迎えた。本園をとりまく人・物的環境は充実してきている。

循環式の池と子どもの遊び

文写真・山崎 晃 (附属幼稚園長)
Yamazaki, Akira



また、生物生産学部の附属農場では成牛の大きさに驚き、生まれたばかりの子牛のかわいらしさに感動し、ミニ豚の赤ちゃんの愛らしさに触れさせていただいたりした。農場独特のにおいにこれまでにない強烈なそして貴重な？体験をさせていただいた。このような園外の活動を通して、子どもたちに自然環境にかかる体験をさせている。昨年度の学内教育研究特別経費によつて、幼稚園の園庭に循環式の池を作ることができた。はじめは地下水を汲み上げる方式を考えたが、工事費やランニングコストを考えた結果、今回のはあきらめざるを得なかつた。循環式のアイデアは、工学部の先生にいただいた。今年の三月に完成したので、

幼児の遊びを発展させ、幼児の自「実現」を導いた。幼稚園に作られた小さな池であるが、幼児の活動の拠点として、またオアシスとして十分に機能している。今、この池は水遊びと小川遊びとの中間的な役割を持つたものであるが、できれば幼児が入って水を中心として遊ぶことができるものと、今ではほとんどみられなくなつた自然な小川遊びができる別々の池と小川を作りたいと思う。

環境教育が叫ばれるようになつたが、幼児期のこのような体験こそが大切である。多くの方々のご尽力、ご協力をいただいて、学内教育研究特別経費によってできあがつた小さな池が、さらには環境教育の大きな力となるように機能させたい。

四月からは水を張つてその中にざりがに、ハヤ、かに、ふな、メダカ、園児がもつてきたブルーギル（他の魚を食べてしまふかもしませんが）などを飼っている。子どもは池の中に入つて、魚を捕まえようとなつかけ回わすが、魚はすばしつこいのでなかなか捕まえることができない。また、池にかかわつて、あの子が！あんな遊びをしている、というように、ふだんの遊びの姿からは想像できない行動をする幼児の姿も見られた。

21 (161) 広大フォーラム28期4号 (No. 331) 1996.10.25